

令和7年度 第1回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

【開催日時】 令和7年7月24日（木）13：30～15：00

【開催場所】 恵庭市民会館 1階 第1会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

委員／佐々木 英明 （北海道文教大学）

山口 広宣 （恵庭市教頭会）

佐々木 保 （有識者）

数井 雅之 （学力向上アドバイザー）

平井 梓 （恵庭市社会教育委員）

事務局／教育長、教育部長、教育部次長、教育総務課長、教育総務課主幹、
教育総務課主査・スタッフ

【内 容】

※議事まで教育総務課長が進行

1. 開会
2. 委嘱状の交付 ※机上交付
3. 教育長挨拶
4. 会議の概要について

教育総務課長より、次の内容について説明

【説明要旨】

今回、新しい委員となられた佐々木 英明委員、数井 雅之委員を含め8名に委員をお願いした。任期は、昨年度から引き続きお願いしている方を含め、令和8年3月31日まで。会議は、本日を含め年3回の開催を予定。

本会議の設置要綱では、所掌事務として「全校の学校改善プラン及び体力向上プランの比較・検証」「ICT機器の整備・活用」「地域との連携・地域人材の支援」「地域における部活動の在り方」などの視点から、全市的な学力・体力の向上に係る事項について研究・協議することや、組織体制、会議の運営等について規定している。

委員への報酬及び旅費の支給は行わないが、公務以外での出席委員について、スポーツ安全協会の「スポーツ安全保険」に加入している。

5. 議事 ※ここから委員長が進行

1) 副委員長の選出について

事務局案を提案し、委員の承認を得た。

⇒副委員長は佐々木 英明委員に決定

2) 学力・体力向上の取組について

事務局より、配付資料について説明した後、意見交換を行うにあたり、令和7年度 学力体力向上に係る取組の内容について次のとおり説明。

① 令和6年度全国学力・学習状況調査および令和6年度全国体力運動能力・運動習慣等調査の結果報告について

全国学力・学習状況調査の内容について、本調査は全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握、分析し、教育施策の改善、学校における教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的として実施している。対象科目については、小学6年生が国語と算数、中学3年生が国語と数学である。

また、生活習慣や学習環境等に関する質問調査を児童生徒と学校を対象に行っている。

なお、恵庭市としては平均正答率を数字ではなく、全国全道との平均の正答率と比較して記号や文言で表している。

結果の概要について、教科に関する調査結果については、小学6年生では国語の平均正答率は全国全道との比較でほぼ同程度となった。算数の平均正答率は全国をやや下回り、全道とほぼ同程度という結果となった。

令和5年度の結果と比べると、国語、算数ともに全国全道との平均正答率の差はほぼ同じという結果である。

中学3年生は、国語、数学ともに平均正答率は全国全道との比較でほぼ同程度となった。

令和5年度と比べると、全道をやや上回っていた国語がほぼ同程度になった。全国については、やや下回っていた数学がほぼ同程度という結果となった。

次に、生活習慣や学習環境等に関する質問調査等の結果の概要について、PC、タブレットなどICT機器をどの程度使用しましたか。という質問について、週3回以上あるいはほぼ毎日と回答した割合が、小学校では全道よりも若干低いものの、全国よりは高い状況、また中学校では全道、全国を大きく上回った形となった。

また、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができていますか。という質問では、当てはまる、どちらかといえば当てはまると回答した割合は、小中学校ともに全国を若干上回る結果となった。

学習した内容について、わかった点やよくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。という質問では、当てはまる、どちらかといえば当てはまると回答した割合は、小中学校とも全国を下回り、特に小学校は全国より4.9ポイントほど下回る結果となった。

学校の授業時間以外で普段 1 日あたりどれくらいの時間勉強しますか。

と質問については、1 時間以上勉強していると回答した割合は全国に比べ、小中学校ともに低いという状況になった。

続いて、令和 6 年度全国体力運動能力・運動習慣調査についての説明です。

調査の概要等について、こちらは施策の成果と課題を検証、改善すること、また恵庭市においては継続的な検証改善サイクルを確立すること、また、学校においては体育、健康に関する指導を改善することなどを目的に毎年実施されているものになる。対象学年は、小学 5 年生と中学 2 年生となっている。

体力、運動能力を測定する種目からなる新体力テストが用いられているほか、児童生徒や学校に対して運動習慣や指導の状況などに関する質問調査も一緒に行われている。

昨年度の 4 月から 7 月までの期間で学校において実施され、本市では小学生約 600 人、中学生約 540 人が参加した。

調査の結果については、数値の公表ではなく、全国学力学習状況調査と同じく記号等を用いて全国、全道平均との比較の状況を表わしている。

小学校の実技の調査結果について、表には握力からソフトボール投げまでの種目の状況とそれらを総合した体力合計点の状況等を示しているが、男子では 20 メートルシャトルランが全国平均をやや上回り、全道平均も上回っていること、また、立ち幅跳びは全国全道平均をやや上回っている。それ以外は全国全道平均とほぼ同程度。女子は全種目を通じて全国全道と同程度という状況であった。

児童質問紙調査の結果について、運動が好きと答えた割合は、男子は全国、全道平均と同程度の割合となった。女子は全道よりやや低く、全国とは同程度となった。また、体育の授業が楽しいと回答した割合は、全国平均と比較して男女ともやや下回っている状況であった。

中学校の調査結果は、男子の 20 メートルシャトルラン、立ち幅跳びは全国、全道平均を上回り、それ以外は全国、全道平均とほぼ同程度となった。女子は全国平均と比較して 20 メートルシャトルラン、立ち幅跳びはやや上回っており、その他については全国、全道平均とほぼ同程度であった。

生徒質問紙の調査結果について、運動が好きと回答した割合は、男女ともに全国全道平均を上回っており、保健体育の授業が楽しいと回答した割合は、全国全道平均と比較すると、男子はやや上回り、女子はほぼ同程度であった。説明は以上になるが、特に小学校の体育授業が子どもたちにとってより有意義なものになるように、小学校体育授業支援などを強化しながら今後進めていきたいと考えているところである。

② 令和 7 年度 学力体力向上に係る取組について（学力向上）

「標準学力検査（NR T）」については、小学 2 年生から中学 3 年生までを対象に、毎年 4 月

に実施している。令和7年度は小中学校ともに昨年度と比べ国語の偏差値が若干下がっており、算数、数学、英語は上がっている状況。結果を分析し、学習改善の取り組みに活用できることから、今後も継続して実施していきたい。

「英検 I B A」については、令和元年度より北海道教育委員会の英語力向上事業として、中学1年生から3年生までを対象に実施している。本事業についても継続することで比較検証が可能となることや、学校全体の傾向や生徒個人の課題を的確に把握できるものと考えていることから、引き続き実施していきたい。

「英検 E S G」については、英検 I B Aと同様に北海道教育委員会の英語力向上事業として、英語教育の充実を図るため令和4年度から小学校6年生を対象に実施している。

「A L Tの配置、外国語指導に係る地域人材の活用」については、新学習指導要領に対応するため、令和元年度からA L Tを4名体制として小学校での地域人材の活用、外国語専科教員等の配置を行い、外国語教育に関わる指導の充実に努めきたところである。引き続き学校における学習状況を確認しながら、A L Tや地域人材の指導時間の適正化について検討したい。

「教職員への研修」については、市教委主催のサマーセミナー・ウインターセミナーや、G I G Aスクール構想に係る研修、教職員等が中心になって開催している校内研修や電子的な取り組みにかかる担当者研修なども実施している。引き続き研修内容の精査や充実を図り、教員の意欲向上や質の高い授業に反映していきたい。

「I C T教育の充実」については、一人一台端末や、電子黒板、指導者用デジタル教科書のほか、令和6年度には全校にデジタルドリルを導入し、I C T支援員も昨年度から2名増員して4名体制へ拡充を図っている。今後も一人一台端末の更なる活用と、それに合わせた教育等を推進していくとともに、電子黒板や一人一台端末等の計画的な更新を進めていきたいと考えている。

「学習支援員等の配置」については、平成29年度から学習支援員を1名配置していたところ、令和6年度からは1名増員し、2名体制に拡充している。また、通常学級において配慮が必要な児童生徒に対応するための特別支援教育支援員については本会議でのご意見を参考に、令和4年度より拡充をしている。引き続き学力向上に関わる効果的な配置や人数等について検討していきたい。

「地域による学習指導」については、学生ボランティアの協力や学校運営協議会の活動として、放課後学習会や朝学習の採点補助などを行ってきている。学校運営協議会は、令和3年度で全校に設置が完了しており、今後も地域住民との協働した取組みが学力向上に繋がるよう進めていきたい。

③ 令和7年度 学力体力向上に係る取組について（体力向上）

「体力向上プランの作成」については、市内全校全学年において新体力テストを実施し、そ

の結果と運動習慣調査の結果を分析し、体力向上プランを各校にて作成していただいている。各校において学習改善の取り組みに活用できることから、今後も継続して実施したいと考えている。

「体育授業への支援」については、「北海道ハイテクACアカデミー」から指導員を派遣し、体育授業で指導いただいております、学校からも好評で、効果的であると考えている。

引き続き効果的な取組や時数増等を検討したい。

「小学校水泳授業における民間プール施設等の活用」については、令和4年度から学校併設の市民プールの統廃合検討に伴い実施している。柏小学校、松恵小学校、恵み野小学校で実施していたが、島松小学校に併設されているプールの老朽化により、令和6年度は4校で実施しており、それ以外の4校には水泳のインストラクター派遣を実施しているところである。

「部活動支援員の配置」については、令和2年度から恵庭中学校の卓球部に1名を配置して以降、毎年1校1名ずつ増員し、昨年度で全校配置が完了した。各校において専門的な実技指導が実施されているところである。配置による効果を検証しながら、今後のあり方についても検討したい。

「部活動の地域移行」については、参考までに資料へ現在の取り組みを記載している。今後進捗に応じて情報提供をしていきたい。

【質疑応答・意見交換】

F 委員：全国学力学習状況調査の概要版の方には、調査結果報告書にあるアンケートが一部反映されていない。朝ごはんを食べているか、どれぐらい寝ているか、など項目がたくさんある中で、概要版に記載されている項目は勉強面に寄っているなど個人的に思った。やはり、学力も体力も、生活習慣がすごく大事だろうと思っている中で、せっかく調査されているのに、意外と生活習慣の面を抜いた状態の概要版なんだなという感想を資料を見て思った。

また、算数と数学の点数の結果で波があると思うが、その山が2コブになっている。それが小学校よりも中学校の方が顕著に2コブになっているが、そのコブは課題とならないのか。

事務局：今回の調査結果の概要版について、ベースとなっているのが、大元の調査結果報告書となる。各教科に関するもの、学習状況についての生徒質問紙、生活習慣にかかっている調査という風になっているが、概要版の中では、学力の状況をお示しした時に、全国や全道と比較して、本市の特徴的なもので概要版にお示しした数値の結果に結びつきそうな今後の改善の視点となりうるものをピックアップさせていただいた。これまでの調査結果の中から、朝食を毎日食べている子供の方が学力が高いであるとか、学力の高い子は毎日規

則正しく寝ているとか、もちろん生活習慣についてもその部分に並行して取り組んでいく必要があるが、概要版の限られたスペースの中で何を取り上げるかという部分では、優先度の中でこれらの項目を取り上げさせていただいたという状況である。全国学力・学習状況調査の結果が出てきた時に、特に中学校の数学において、ラクダのような、上位層の山と、下位層の山が 2 つ出てくるという傾向は、本市だけではなくて、全国的にもその傾向が見られるところである。本来、正規分布で並んだ時に大きな真ん中の山になるが、そこには、問題の難易度、プラス、子供たちの学力という能力の問題が中学生にかかってくるため、必ずしも 1 つの正規分布にはならない、いわゆる、2 極化という部分が存在するという風に捉えている。

昨今はそういった問題も同時に分析できるようにということで、今回の中学校の理科については、子供たちの能力と難易度を同時に分析をかけながら、国際的な学力調査のように 500 という指標を真ん中に置きながら、その 500 に照らして子どもたちの能力を分析できるような調査、IRT というスコアが用いられたテストが、今年度からスタートした。令和 9 年度にはそういった方向で、問題の難易度によらず経年変化が比較できるような特徴を持った調査方法に移り変わっていくという状況である。

A 委員：学習支援員等の配置について、特別支援教育学校補助員を各学校に設置したということだったが、この方々の役割についてお聞きしたい。

事務局：現状で申しますと、通常学級及び特別支援学級両方に入っていており、具体的な内容については、学習支援、基本的生活習慣確立のための日常生活の補助、教室間の移動時のサポート、健康・安全の確保いうところが主な業務になっている。

業務内容については、校長先生の裁量である程度柔軟に行うことができるため、通常学級、特別支援に限らず、児童生徒の支援を行わせていただいているという状況である。

委員長：どれくらいの人数がいるのかお聞きしたい。

事務局：全校で 35 名配置されており、各学校については 2 名から 4 名配置されている状況である。

A 委員：各学校において教員の欠員状況をお聞きしたい。

事務局：現状、欠員は発生していない。

委員長：平日 1 時間以上学校以外で勉強していると答えている割合が、小中学校ともに顕著に低いというところがあり、少し残念である。それぞれ各学校も努力されていると思うが、この結果について、市教委としての考え、評価をお聞きしたい。

事務局：一つの事例から申し上げますと、コロナが流行する前においては、家庭学習の提出を子どもたちに求めながら、先生方はしっかりとそれを確認して毎日やり取りをしていた。取り組み状況では 8 割近くの子どもが毎日家庭学習を続けていたものである。しかし、コ

ロナを挟み、先生方の働き方改革もあり、その辺りは手が緩んだという分析を学校はしているが、わずか数年間の中に家庭学習を提出する子供が3割以下に下がった、家庭で勉強する子供の割合が下がったという学校の事例が1つある。

1時間以上勉強している子どもの割合は過日、文部科学省がこの学校調査の分析の専門会議の中でも1つ話題にしており、全国的にこの傾向は非常に高まってきている、子供たちの家庭学習の時間が非常に少なくなっていることを、専門会議員の皆さんも危惧していた状況にある。

合わせて恵庭市の部分は、先生方の授業改善は進んでいるが、実際に子供たちの定着の度合いが非常に弱い。定着をさせるためのまとめ、振り返りを強化していくとともに、そこと家庭学習を連動させながら、しっかりと子どもたちが授業でやったことを身につけていくというところに視点を置いて取り組みを進めなければならないという、校長会の分析に基づきながら組織的な対応についても進めていただいているところである。

委員長：D委員は、現場の実感としてどんな風を感じているか。

D委員：家庭学習については、やはり学校が終わる時間が高学年の場合だと15時35分。

そして、家に着く時間が大体16時ぐらい。そのあと少年団活動等習い事に行って、帰ってくる時間はほぼ19時、20時ぐらいの感覚である。そこから、家庭学習を行うとなると、お風呂も入ったり、ご飯も食べたりしないといけいないので、非常に家庭学習を行う時間が切迫しているというのは小学校の1つの課題だと思う。中学校はもちろん部活動があると思うが、小学生の場合、その後習い事等で帰ってくる時間がかかり遅いというのは、やはり課題だなと思いながら、先生方とも話している現状である。なかなか1時間学習するというのは相当ハードルが高いなというところはある。

低学年はもう少し学校の時間が短いため、時間的なゆとりは多少あると思うが、中学年以上からはやはり厳しいかなと。

F委員：学校以外での勉強時間について、この調査のターゲット層におそらく私の子供も入っていますし、私のお友達の子供たちも入っているので、お母さんたちの話の内容を紹介する形になるが、私自身出身が奈良県で、お友達も本州の方に多い。お友達の子供たちの状況を聞くと、やはり中学校受験している子が多いとのこと。この6年生の結果を全国と比べるというのは、北海道はやはり中学校受験する風習が元々すごく少ないので、酷だなという風に思う。あまりその差は比べないでいいのではないかな。

学校外の勉強時間というのが、学習塾なども含むとなっているので、それが受験をしようと思っているのか、いないのかで小学校6年生の過ごし方は大きく違ってくると思うので、あまりここは気にしなくていいのかなという風には思っている。その場合中学3年生の全道平均と恵庭市平均は大体同じなので、これはやはり高校受験に向けてという意味で、

学校以外の勉強時間というのがしっかり取られているんじゃないかなという風に私は思っていて見ていた。先ほど D 委員も仰った通り、子供たちが家で勉強する時間というのは、母親からしても取りたくても取れなく、学区外の少年団とかで活動をすればするほど、睡眠か、家庭学習かという天秤にかかることになってしまい、じゃあ週末にまとめてやる。となっても、週末こそ大会があったりして遠出したりするので、中々難しいなという風には思っている。

でも、家庭学習をやらないと定着はしない。私は数学の 2 極化はそこに出ているんじゃないかなと思っている。今、タブレットでのデジタルドリルがあると思うが、あれはどれぐらいみんな使用しているのかなと気になるところである。あわせて、どれぐらい効果があるのだろうか。意外と短時間で手軽にできるという良さはあるかなとは思う。

委員長：タブレットでのドリル利用状況について、なにかデータ等はあるか。

事務局：デジタルドリルだけではなく、ICT 機器の活用で授業時間以外に勉強にどれくらい使っていますか。というのが全国学力・学習状況調査報告書の 17 ページにあり、恵庭市の回答率、小 6 で 17.3 パーセント。中 3 で 16.4 パーセントとなっている。

デジタルドリルの毎日の取り組み時間については把握できていないが、1 児童生徒あたり 1 日平均取り組み問量は大体 1.4、1 単元は 10 問程度、1 問あたり取り組み時間を 2 分と換算した場合は 28 分という風になる。

D 委員：タブレットドリルについて、非常に今小学校の現場で困っていることは、格差についてである。特にできる子どもたちをどうするかという問題。今まではできない子どもたちをどうするかということであったが、できる子どもたちが時間を持て余し、何もやることがなくなってしまうということが、小学校の場合かなり増えてきたという状況から考えると、タブレットドリルは、何回もできる。紙のドリルであれば 1 回やったらもう終わりだったところ、何回も繰り返してできる。また、AI が自分の苦手なところを抽出して、さらに他の学年、下の学年の自分が習った問題をもう 1 回学習できるというところは、非常に先生方も助かっている。週末に家庭学習で持ち帰ることができ、夏休みや冬休み中も夏と冬の専用の問題が配信されたりする。また丸つけもしてくれるため、親にとっても学校にとっても非常にありがたい機能がついており、さらに活用していく必要があると思っているところである。

A 委員：3 点ほど伺いたい。1 点目は、ALT の配置について。1 名増員されて 4 名体制という話があったが、例えば高学年で全時間配置だとか、今後、人材配置の拡大は具体的にどのような見通しがあるのか検討ということでお話しされていたので、そこについて教えていただきたい。

2 点目は、地域住民による学習支援について、コミュニティスクールは全校に配置済み

であったため、地域学校協働活動本部の設置状況と具体的な学習支援の取り組み状況、取組校が何校ぐらいあるのかということ、取組校の人数について、また今後そこに向けての課題は何か、といったところを把握していれば教えていただきたい。

3 点目は、質問紙について。全国学力・学習状況調査の質問紙で、やはり最初にここが気になってしまったが、学習した内容についてわかった点、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか。という問いについて。私、たまたま学生を連れて若草小学校の授業を見せていただいたが、しっかりと課題解決的な学習を取り組むということで、非常に学習規律、学習方法などが揃っており、大変素晴らしい取り組みだなと思った一方、こういう課題が出た時に、小学校のタブレットの使用頻度が課題ですという話が先ほどあったが、例えば毎時間タブレットに自分の学習の振り返りを記録していくような教育研修の機会、いわゆる基礎的な基本的な話題が ICT で主に出ているが、問題解決的な学習における ICT 機器の活用の研修など、そういった機会というのは先生方にあるのかどうかをお聞きしたい。

事務局：ALT の配置について、今現在 ALT の配置は全学校で平均して大体 6 割ぐらい授業に入れている状況である。加えて地域人材の方も入っており、そこも合わせると充足率は大体 8 割程度である。ある程度高い数字が保てているため、今すぐ拡大というところは考えていないが、今後そういった点も踏まえ検討していく必要があると考える。

事務局：地域住民による学習支援について、正確に何校というところは現状把握していないが、今まさにそういう活動、地域の方が学習支援で関わる部分が強まってきており、その活動の様子を各学校で共有するような校長会、教頭会の場面でそういうことは共有されつつある。

最近のトピックとして、島松小学校で朝の時間の丸付けを地域の方の力を借りようということで、お声がけしたところ、20 名近く来ていただいた。あと、D 委員より触れていただいた方がいいかなと思います九九の部分の情報についても、共有願いたい。

D 委員：小学校 2 年生で初めて九九を覚える時に、先生は九九カードを作ったり、検定のよいうな形で九九の発表を行ったり、シールを張ったりと作業が多々ある。これは休み時間にしかできないため、休み時間の時に子どもたちは先生の前でずらっと並んでやっていくが、やはり先生方は中々聞く時間が取れないので、そこに人を増やしてやっていこうということで、CS の方々、地域の方々 10 名ほど来ていただいて、休み時間に別室で検定ができたということも一例としてある。

委員長：コミュニティスクールの取組みの中でも、人材を登録しながら、ミシンの使い方についての支援など、各学校それぞれ工夫しながら取組みを進めているという話も聞いている。

事務局：今 2 つ紹介があったが、今後も同じような動きが活性化してくると思うので、こちらで社会教育と連携して把握するように努めていきたいと感じた。

事務局：タブレット活用の先生方の研修についてのご質問は、学習過程における文字の課題を設定してまとめ、振り返りに至る問題解決的な学習過程について、恵庭市のみならず、石狩管内の各学校においては、もう 10 数年来、数十年来において取り組まれてきており、子どもたちの学びの過程としては定着しているのかなという風に捉えているところである。一方、そういった中にこの GIGA スクール構想にタブレットが持ち込まれてきたということで、恵庭をはじめとする札幌市を除く 7 つの市町村教育委員会、共通して石狩教育局の指導のもと、授業改善の視点として、いわゆる子供たちの対話を重視した学び合いの活動の重視、合わせて ICT の効果的な活用、この 2 点を授業改善の視点に取り入れながら、より良い授業に向けて取り組みましょうということで、石狩教育局指導のもと進めてきたところである。実際にはタブレットそのものの活用はどんどん進んできているが、現場の先生方の悩みとしては、タブレットの効果的な活用という部分の中で、タブレットの長所を活かしたデータ、それから色々なものを同時に共有することができるというメリットを活かしながら、そこから価値交換につなげていくプロセスのところ、先生方が授業作りの中では非常に苦労している状況である。教育委員会としては、そういった先生方の授業作りのタブレットの使い方ということで、これまでも夏休み、冬休み、それぞれ先生方の研修講座というのを開催されており、情報教育センターの指導主事の先生を講師として招聘しながら、効果的なタブレットの利用について研修を少しずつ深めていただいているところである。

委員長：では、最後に E 委員より総括願いたい。

E 委員：今、ICT 関係の話がされていたと思うが、全国学力・学習状況調査の概要の方にも出ている通り、タブレットの使用についてほぼ毎日、週 3 回以上、という回答では、恵庭市は小学校、中学校ともにいい結果である。これは数字に出ている通り、先生方が非常に努力しておられて、一人一台配布されているタブレットを使って、それを上手に授業の中に入れていこうという取り組みを進んで行っているという結果である。先ほど事務局の方からあったが、有効的に授業の中で子供たちの身についていくような形で上手くその授業の中で行っているかということ、そこは微妙なところで、例えば見せて終わってしまっているとか。そういうような使い方の部分を色々な研修含めて、うまく授業の中に揃えていけないといけないと感じる。ただ、あるものを使っていこうという部分は私も何回か授業を見させていただいた中でも取り組まれているなという風に思っている。

また、F 委員が言われた通り、1 日あたりの時間が今度は逆に全国全道平均よりも低いというのは、やはり児童生徒たちの生活習慣と、大きく密接しているのではないかなとい

う風に私も思う。授業で学んで、その時はわかったという風に思っても、そのわかったが定着していくためにはある程度取り組む時間が必要。それはタブレットを使う方法もあるだろうし、紙に書いて覚えて、計算して覚えてという方法もあるかなとは思いますが、いずれにしても時間が足りない。遅くまで部活や習い事等をやっている子は、帰ってきてから勉強するとなると、もう疲れてヘトヘトで、やっている余裕がないというような状況である。睡眠時間の確保も考えるとなると、小学生も中学生も中々難しい。だとすれば、1日をスパンで考えるのではなく、例えば1週間をスパンとして、土日は練習や試合等もあるとは思いますが、ある程度時間を使える時に例えば1週間学んだ事柄を振り返ってみるだとか、自分の持ち方というものを考えてみたらどうなのかなという風に思うし、そうじゃないと逆に難しいのではないかなと私自身は考えている。また、その地域の方々、CSが非常に恵庭市の学校に対して、積極的に関わっていきこうということで、本当に学校にとっても非常に助かっている状況だという風に感じている。

委員長：それでは終わりにしていきたいと思うが、学力・体力を向上させるというのは、親御さんの1番の願いであり、先生方、あるいは全ての大人の願いではないのかなと思うが、実は1番それを願っているのは、児童生徒自身だということがある。

というのは、今年の3月に私が関わらせてもらっている恵明中学校の慈愛の森の子どもたちにアンケートをお願いして、慈愛の森で良かったと思うことは何でしたか。という問いと、これから変えてほしいこと、こうだったら良かったなと思うことは何ですか。というアンケートを無記名で書いてもらった。その中には、静かなところで勉強できてよかった。無理に人と話さなくていいところが良かった。という意見もあったが、実は1番多かった回答は、新しく習うところやわからないところをしっかりと教えてくれたところ。ホワイトボードなどを使って分かりやすく教えてくれたところ。勉強の説明がわかりやすいから来やすかった。分からないところは詳しく教えてくださり、わからないことをわからないままにしないで済んだこと。というようなこういう意見が多かった。私たちは、少ない人数にマンツーマンに近いような形で、これと同じことを各学級でできるかという、できないに決まっているが、ただ子どもたちの思いとしては、勉強をわかりたい、できるようにになりたいという強い思いを持っているということを本当に強く感じた。

そういう意味からも、この学力・体力向上推進会議の中で、皆さんに色々意見を出し合いながら、少しでもそういう子どもたちの期待に応えていけるような、話し合いができればいいと思うので、次回以降も是非貴重なご意見を頂戴したい。ありがとうございました。

事務局より次回の会議の日程等について、お願いしたい。

7. 次回の会議日程について

8. 閉会